

八頭町・日下部窯跡出土陶磁の検討 — 石見焼・因久山焼との比較を基に —

八峠 興¹

A study on The Excavated articles of the Kusakabe Kiln remains in Yazu City, Tottori prefecture.

Kou YATOUGE¹

はじめに

日下部窯跡は鳥取県八頭町（旧八東町）の日下部字釜屋に所在する幕末期の瓦と陶器（丸物）の窯である。開発工事のため、平成14（2002）年に試掘調査、15（2003）年に窯体と物原が発掘調査され（八東町教育委員会2004）、現在は道路として使用されている。

近年、鳥取城下の発掘調査で日下部窯の製品が確認されるようになり、当窯（日下部窯：以下同）のより詳細な分類と報告が求められつつある。そこで試掘調査を含め、発掘調査で持ち帰られたほぼ全個体の遺物を図化し、製品1/4・瓦1/5、窯道具を1/5の縮尺で掲載し、文献史料も併せ報告する。

当窯の製品は形状及び使用する釉や窯道具等からみて、鳥根県西部を中心とする石見焼（石州系）を主体とする。石見焼についての研究は、平田正典氏の著作（平田1979）のほか、近年では発掘による窯跡の調査（鳥根県教育委員会2001）、松江城下ほか消費遺跡でも出土資料が増加している。

また当窯を調査する過程で、幕末期の鳥取藩の御手懸り窯である、因久山焼との関連も確認できた。

因久山焼は八頭町の久能寺に位置する江戸時代後期に遡る窯跡である。概要については窯元九代の蘆澤良憲氏の著作（蘆澤2001ほか）に加え、蘆澤氏が地所の物原から採集した資料⁽¹⁾がある。今回はその資料についても記録作成を行い、併せて報告する。

1 発掘調査の概要

当窯の東側には八東川が北流し、南側の丘陵沿いには福井を経て船岡に至る「船川」用水があり、高瀬舟

が使用されていた（平凡社1992）。下流約2.5キロメートル程の福井周辺には福井焼が想定され、2.2キロメートル程上流には才代窯跡が位置する。

当窯の窯構造は連房式の登窯で、基壇部と物原の一部の調査が行われた。大口、一ノ間、二ノ間、三ノ間、煙道があり、間の長さは均一でなく、物原も瓦から陶器へ転換していることから、途中で改修が行われたと考えられている（八東町教育委員会2004）。

窯体内にはいくつか窯道具が残されていたものの、遺物の大半は物原からの出土である。窯道具をはじめ、未成品の素焼きや焼成不良品、焼き歪みのあるもの、融着資料に加え、一部他窯の陶磁器類がある。

2 分類

(1) 素焼き等（1～24）

素焼きは、確実に当窯の製品として評価できる。石見焼では、一般的に釉薬を「生掛け」するが、素焼きをする場合は施釉に耐え得る目的で、800度前後に焼くという（江津市文化財研究会1988）。

当窯での素焼きの破片は、壺・甕・播鉢等はなく、釉の発色不良の未製品が目立つ。一方植木鉢のように素焼き主体や焼き締め製品もある。

1は小碗。2は無高台の丸碗で、焼き締める。3・4は片口をもつ水差。5～8は浅碗もしくは腰折碗。口縁部に2条の凹線文が入る。7は素焼きの後に施釉するも未焼成のまま廃棄される。9・10は小型の香炉。底部の三方向に円錐形状の脚をもつ。11は大型徳利の底部で、施釉するも発色不良。12～16は鉢で、12の口縁部は外側に屈曲する。13は口縁部を水平に延

¹ 鳥取県埋蔵文化財センター 〒689-0151 鳥取市国府町宮下1260番地

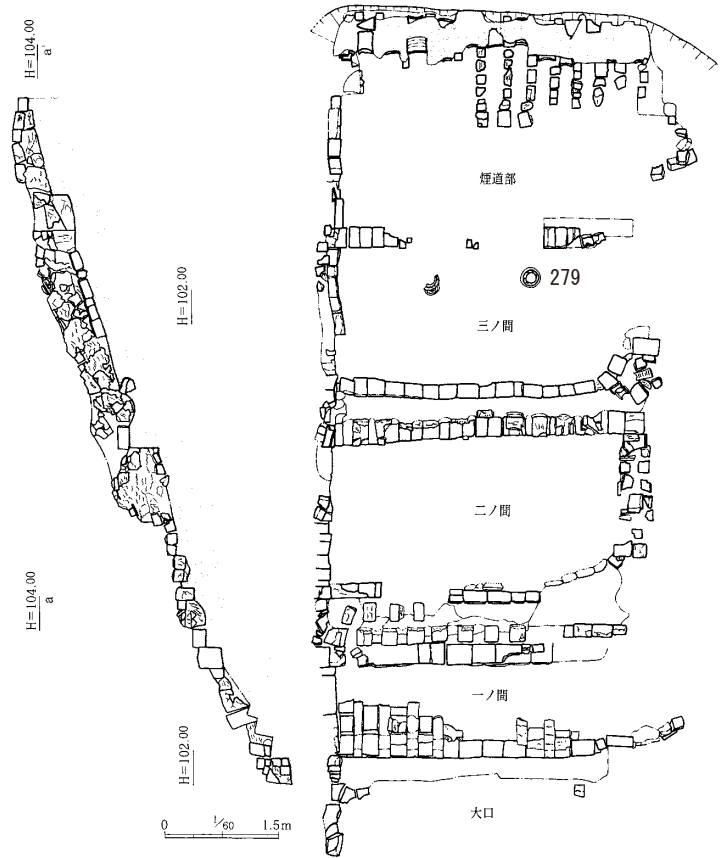
Tottori Prefectural Center for Archaeological Operations, Miyanoshta 1260, Kokufu-cho, Tottori, 689-0151 Japan

E-mail: yatougek@pref.tottori.lg.jp

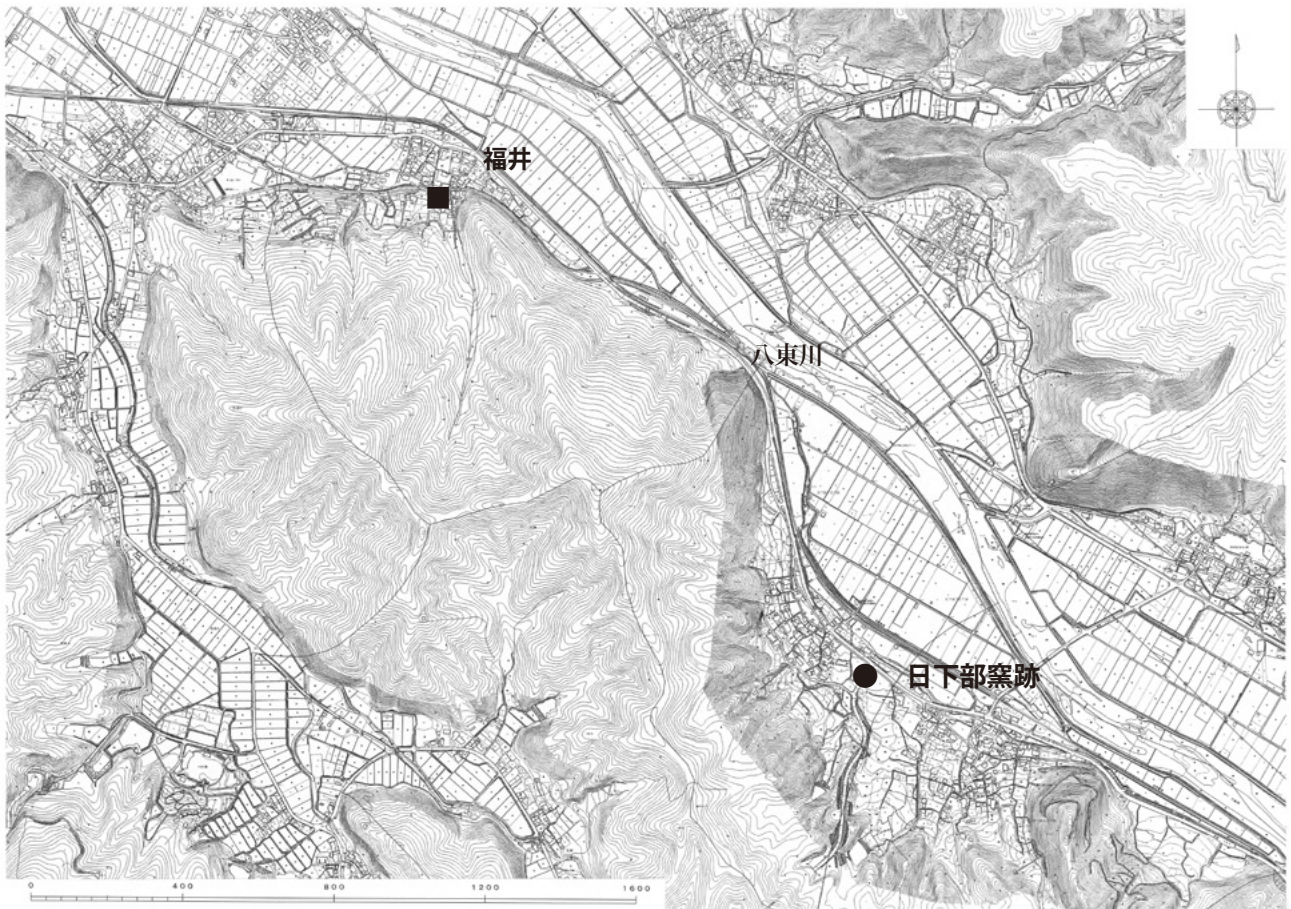
[受領 Received 30 November 2014 / 受理 Accepted 17 January 2015]



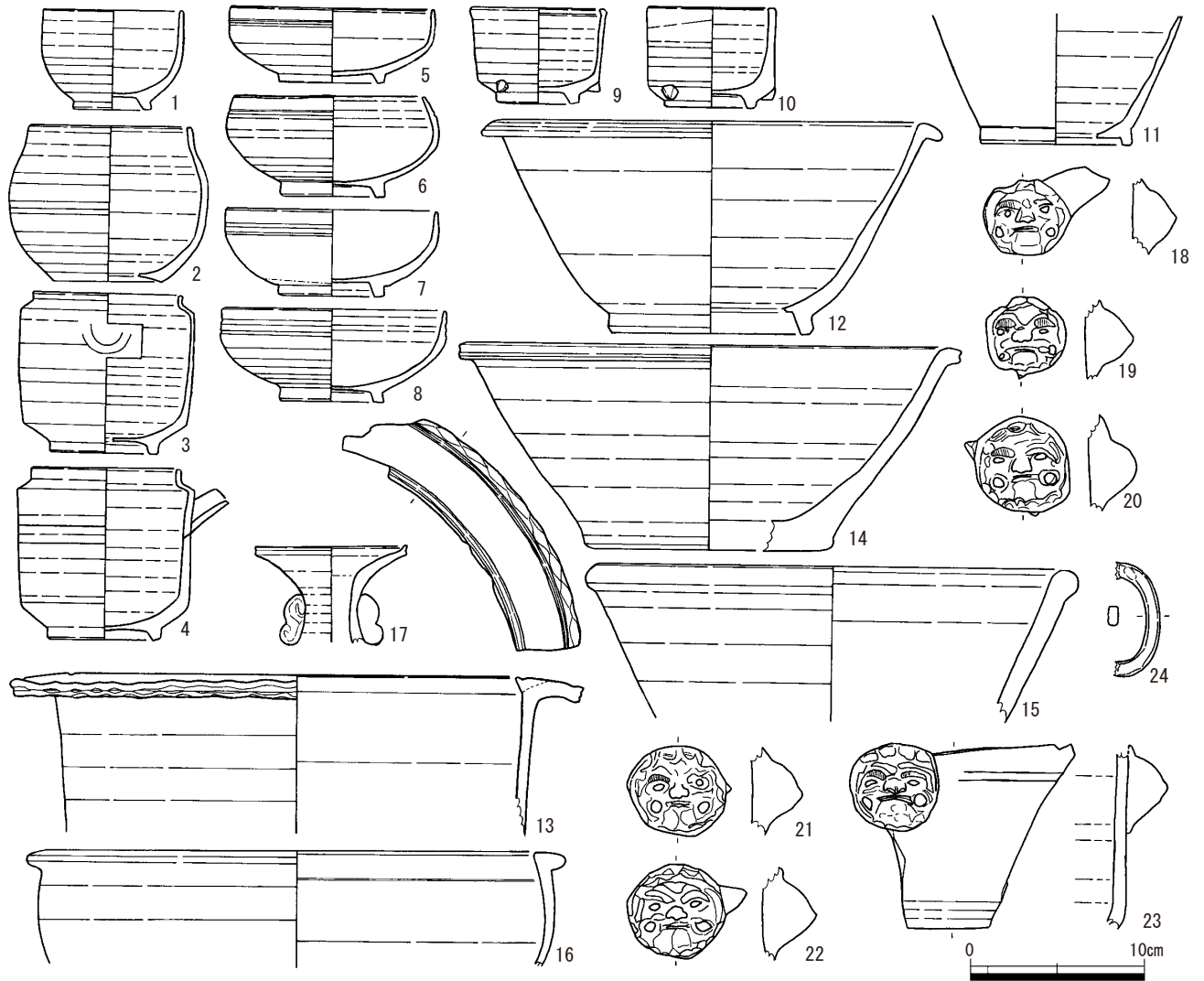
第1図 日下部窯位置図
(国土地理院地形図から一部転載・加筆)



第2図 日下部窯遺構図 (八頭町教育委員会 2004 から転載)



第3図 周辺地形図 (1/20,000) (八頭町教育委員会提供から一部転載・加筆) ■は図版5の位置



第4図 素焼きほか

ばし、端部を花卉状に装飾する。14は口縁端部に凹線が入る。15は口縁端部を拡張し、16は体部が膨らみ、口縁端部が外側に張り出す。いずれも植木鉢か。17は仏花瓶。頸部に双耳をもつ。18～23は火鉢の獅子頭部。24は水注または油注に付く把手で、3・4のいずれかと同一のものか。

(2) 陶器

石見焼では、来待釉をかけて1300度程度の高温で焼成すると石粉が融解し、赤色に変色する⁽²⁾。黒色にするには来待釉7、並釉3を混ぜたものを用いる。「並釉」とは、温泉津石を用いた透明釉で、長石を主体とし、石灰を混和させることで釉薬として使用できるという（江津市文化財研究所1988）。

当窯では、釉は基本的には来待釉を用い、釉調は赤褐色、黒色、褐色、オリーブ等の釉色がある。

釉による装飾は、甕に用いられる「流し」のほか、香炉や火鉢によく用いられ釉を重ねる海鼠状の釉、浅

碗や花筒に護摩状の釉等、釉の重ねがけを行う。

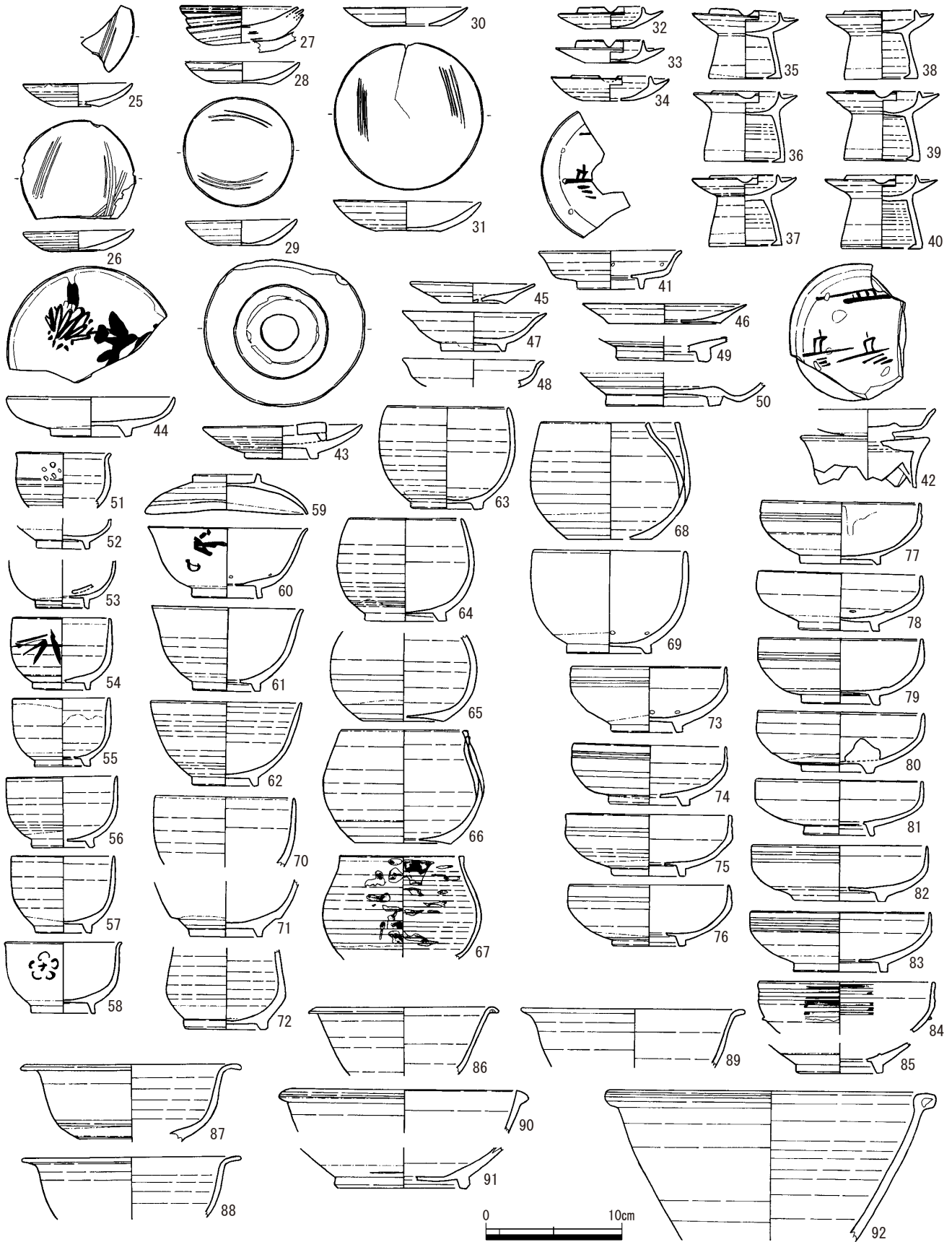
a 灯明皿（25～40）

25～30は小型、31は中型で内面に芯の滑り止めをもつ灯明皿である。櫛目は三本程度で、26では向かい合わせに配置し、一方は「×」状にクロスさせるが、29・31は一部省略される。27・28・30は滑り止めをもたない。27は口縁端部付近のみ暗赤褐の釉で三枚が釉着する。25は灰オリーブ、26・28は黒褐、29は灰白、30・31は灰黄の釉。

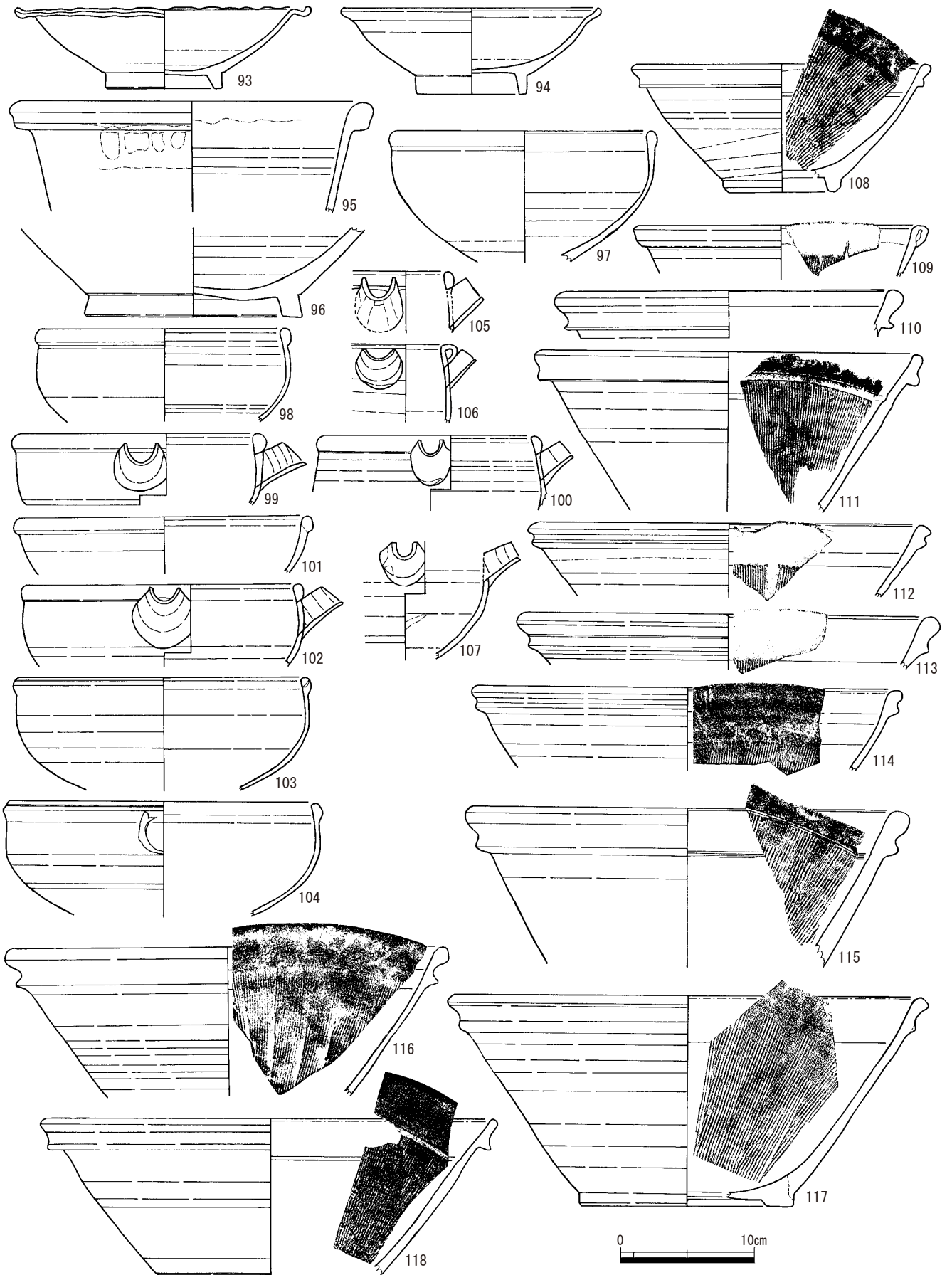
32～40は内面に立ち上がりをもち、軸受けのために一箇所を切欠きする。32は赤褐、33は黒褐、34は発色不良。35～40は受け皿の形状はそのまま脚台をもつ。35はオリーブ黄、36は黄灰、37・39は灰白、38は発色不良、40は黄橙の釉。

b 皿（41～50）

41・42は口縁部が外反するやや深い小皿で、見込みには灰白から明オリーブ色の釉に鉄釉で帆かけ船等



第5図 陶器 (1)



第6図 陶器 (2)

を描く。47・48は端反の小皿。47は土のきめが粗く軟質の焼きに黒褐色の飴釉を施す。瀬戸村周辺か。43・44は中皿。44は黄橙に黒褐の釉で見込に複数の花を描く。45・46は無高台の皿。口縁部は長くやや外反気味であり、灯明とは異なる皿か。49・50は底部で、49は浅黄、50は灰オリーブの釉。

c 小碗 (51～58)

いわゆる湯碗。51は灰オリーブに灰白色の点で梅を表す。52はいわゆるもぐさ土に黄色釉で、瀬戸村周辺か。53はオリーブ黄、54はオリーブ褐色に黒色釉で笹文。55は褐釉を二度掛けする。56は灰オリーブ、57はオリーブ褐の釉。58は浅黄色にオリーブ褐で梅文を描く。

d 蓋 (59)

1点のみ確認した。外面から内面口縁端部にかけて黒褐の釉を施す。

e 碗 (60～85)

60・61は端反の碗。60は浅黄の釉に黒褐の釉で、「寿」か。61は黒色の釉で、黒楽碗を意図したものか。62の口縁部は直線状。灰オリーブの釉。63～70は丸碗。63・64は高台をもち、63は黒褐、65・66・68は無高台で、66・68は焼き歪みが大きい。69・70の口縁部はほぼ直立する。65は暗オリーブの釉、66・71は灰白、67はオリーブ褐にオリーブ灰の不明文。68は灰色の釉、口縁端部は口剥げ。69は灰オリーブの釉。底部四箇所の目跡。66・67・69の口縁部には口紅釉、70は浅黄の釉で鉄釉の口紅釉。71・72は底部のみ。71はにぶい黄橙の厚い釉。外面底部付近は露胎。72は筒碗か。灰褐の釉。

73～85は浅碗。73・75・76・79・80・83は黒色、74・77・78は灰オリーブ、81は暗褐色の飴釉、82は灰色に白色の護摩状の釉、84・85は来待釉に黒色の「流し」。73は見込に三ヶ所の目跡。

f 小鉢 (86～91)

86～89の口縁部は外反する。91は高台部付近のみ。86は灰、87～89・91は灰オリーブの釉。90の口縁部は玉縁状、暗灰色で口縁端部に口紅釉。

g 鉢 (92～96)

92は深鉢で、口縁端部を丸く折り返す。内面に回転ナデの痕が連続することから、凹凸を利用した捏ね鉢か。灰オリーブの釉。93・94は浅鉢。口縁部は「て」の字状に屈曲し、高台は高い。93の口縁部は波状に装飾し、見込は蛇の目釉剥ぎ。灰オリーブの釉。94の見込も蛇の目釉剥ぎ。釉は灰黄橙で発色不良。95は玉縁の口縁をもつ植木鉢か。黒に灰褐の海鼠状の釉。96は捏ね鉢の底部か。灰オリーブの釉。

h 片口鉢 (97～107)

口縁部は玉縁状で、1ヶ所の注口をもつ。97は灰オリーブに外面底部付近はにぶい赤褐の釉。98～103・105・107は灰オリーブ、104は浅黄、106は灰色の釉。

i 播鉢 (108～120)

口縁部は玉縁状で中央を窪ませる108・110～118・120、折り返す109、二本の凹線をもつ119がある。播目は七～十数本程度の単位をもち、底面から密に上方に入れる。口縁端部付近の播目は、入れた後に工具等で区画を設け、上部はナデ消す。底部は装飾的な入れ方をせず、放射状で密に、隙間なく入れる。

108・109は小型品。108の高台は比較的高い。暗赤褐の釉。109は黒褐の釉。110～120は大型品。外面は110・113・114が褐、111・116はにぶい赤褐、112は黒褐、115は暗赤褐、117は褐灰、118は灰褐に黒護摩の釉。内面は並釉もしくは露胎が多く、110・113・114・118の口縁端部付近は外面と同じ釉を横方向に薄くハケ塗りする。

117は低く幅広の高台をもつ。119の口縁端部には二本の凹線があり、底部付近に重ね焼きのバリが付着する。底部は低い高台で底の中央が盛り上がり、播目は密で放射状に入る。暗赤褐色の釉を横ハケ塗りする。焼き上がりも堅牢、確認できたのも1点のみで、完形品であることから別窯の製品であろう。120は幅広の注口をもつ大型品。暗褐色の釉。

j 鍋 (121～125)

121・123・124の口縁部は「て」の字状に屈曲、122は外方に突出する。121・123は無高台。122・125は有高台、123は釣り手、121・122・125は底面際に小型の脚をもつ。121・123はにぶい赤褐、122は暗青灰、124は灰オリーブの釉。125は底部で高台と円錐形状の脚をもつ。灰オリーブの釉。

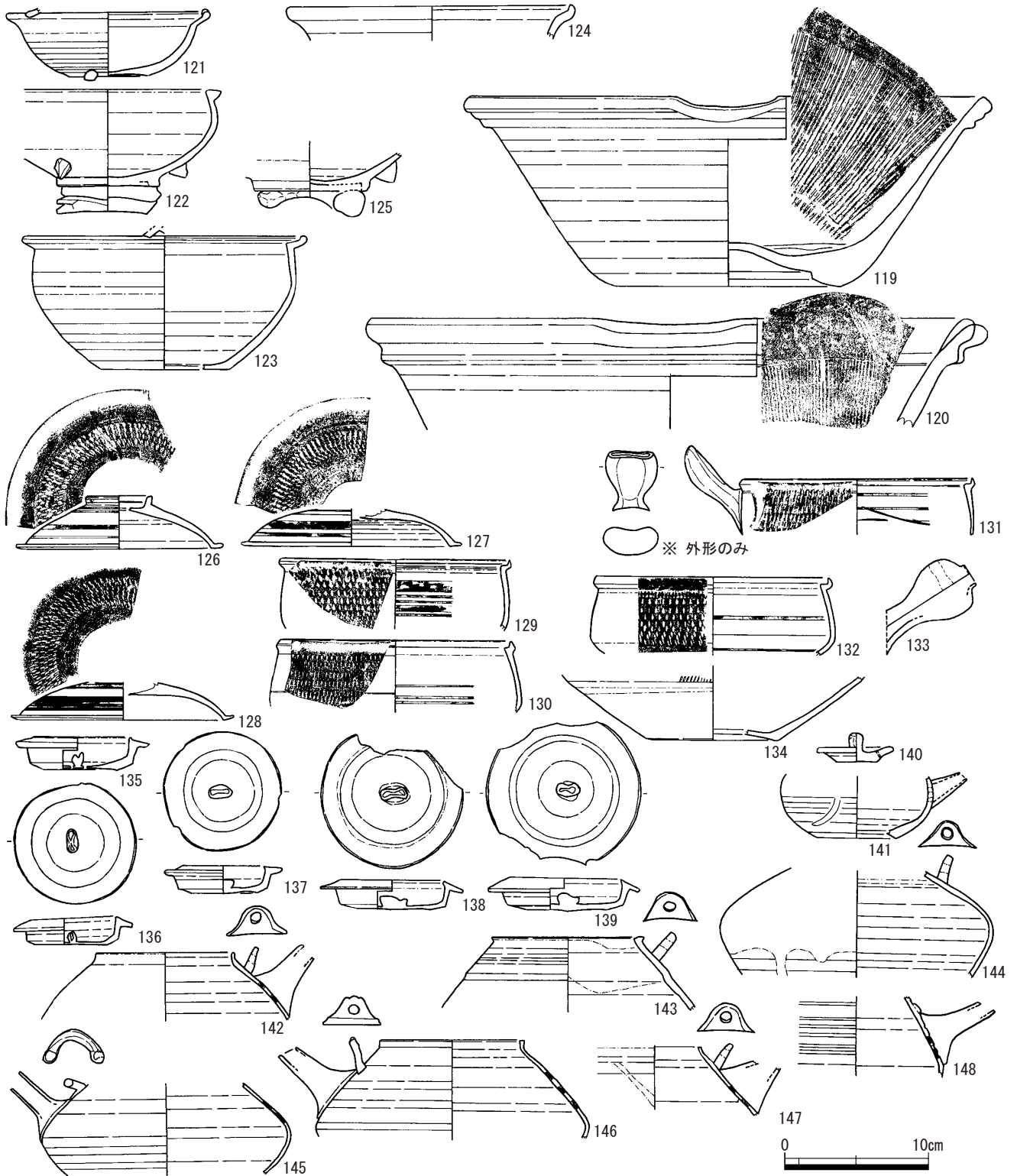
k 行平 (126～134)

蓋と身がセットになる。

126～128は蓋。口縁端部は水平方向に延びる。リング状のつまみの周囲に飛びカンナ及び黒褐色と並釉のラインが入る。129～131は体部。口縁端部は受け口状に屈曲し、体部はやや下膨れの形状。129は黒褐、130・131は灰褐、132は暗褐の釉。

133の把手は断面円形で赤褐の釉。131は意図的に扁平になるよう上下に潰す。因久山焼きの411のようなものを意識したものか。

134は行平の底部で、形状は一回り大きい。焼き上がりは橙色で、飛びカンナと赤の帯状の釉をもつことから浜坂焼(八峠2013)と考える。



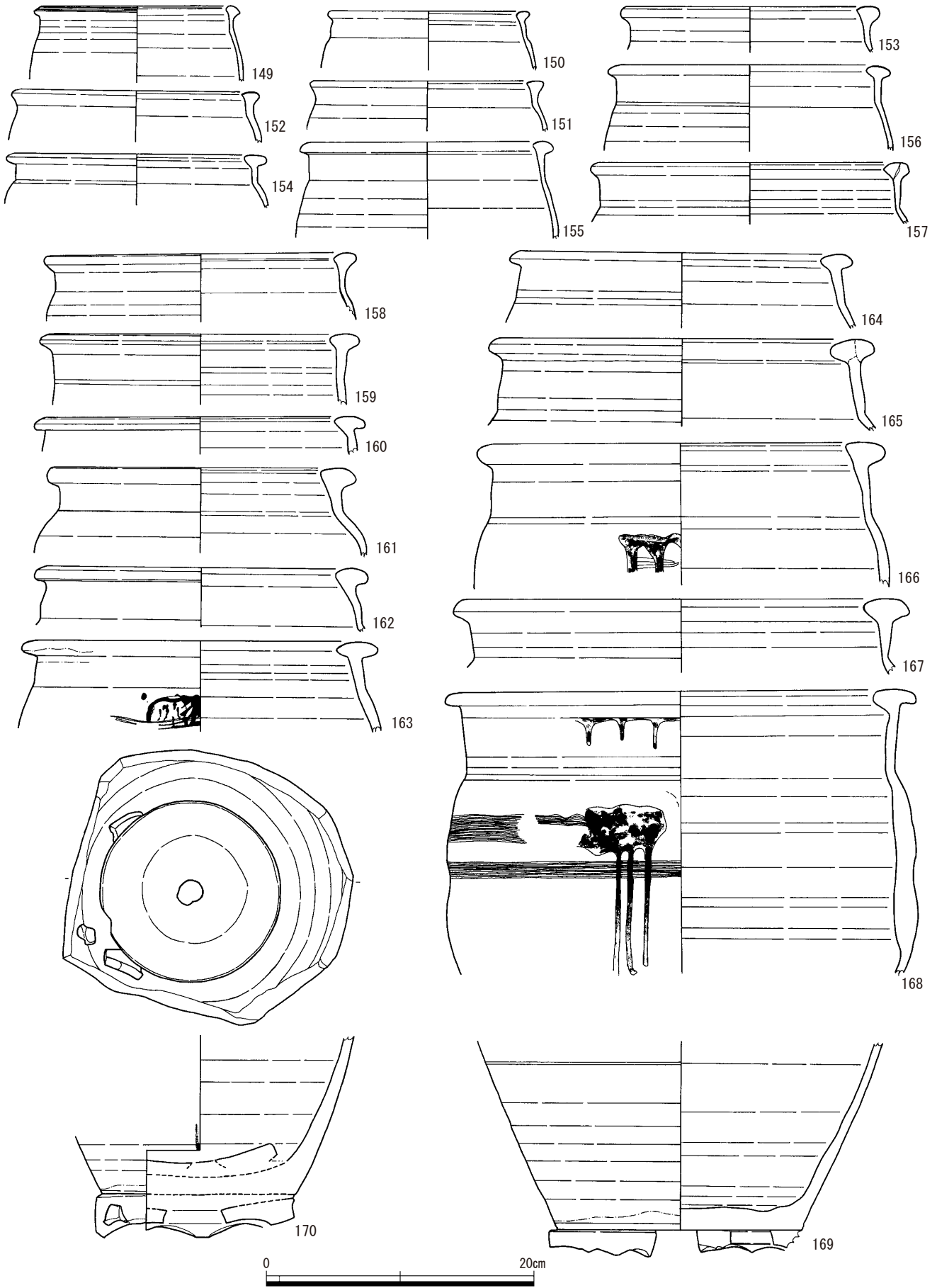
第7図 陶器 (3)

1 土瓶・急須 (135～148)

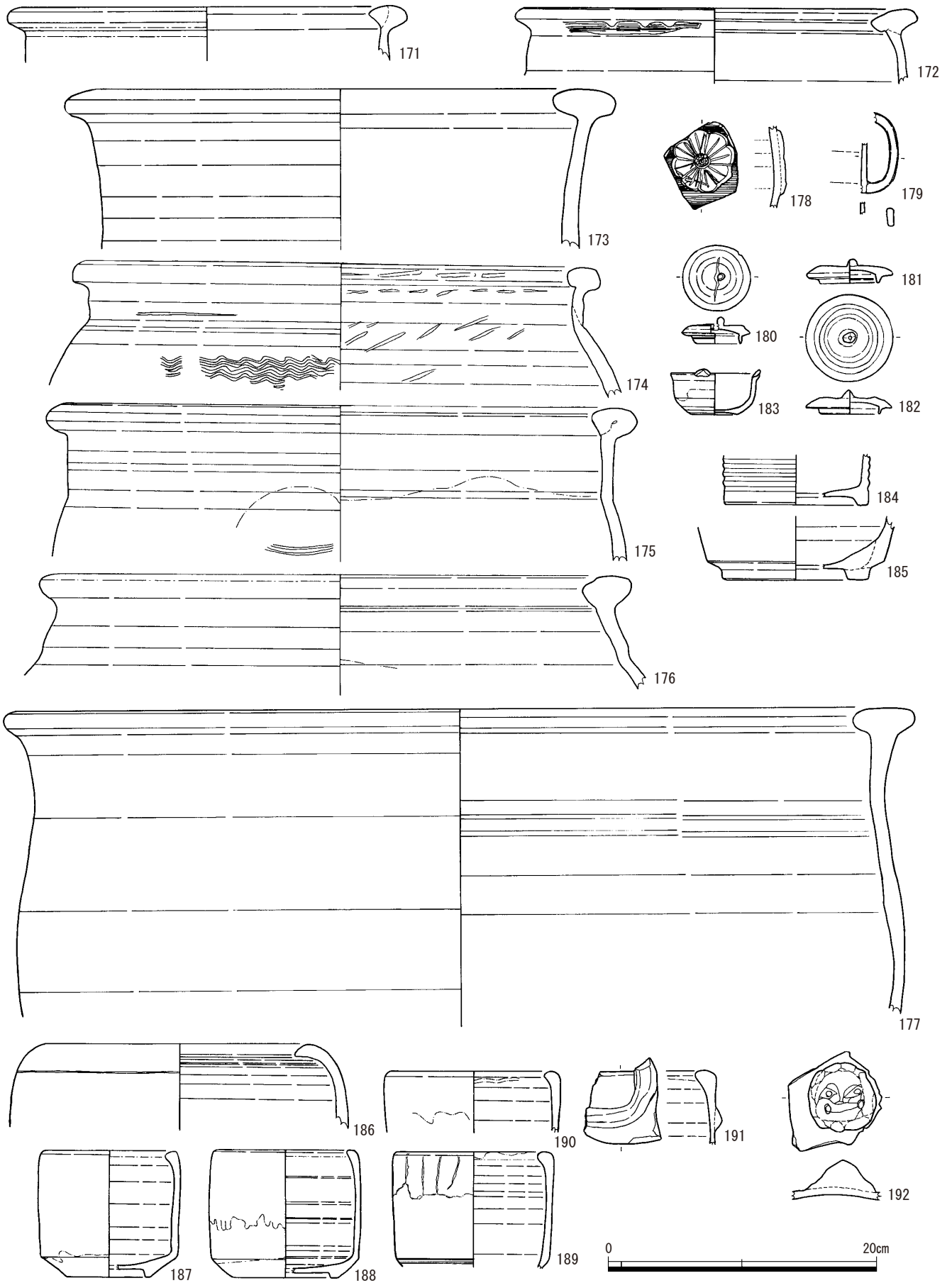
135～139は土瓶の落とし蓋。口縁端部は「て」の字状に屈曲し、潰した扁平のつまみをもつ。135は灰白、136はにぶい赤褐、137は淡黄、138はにぶい黄橙、139は暗オリーブの釉。140・141は急須の蓋と身。いずれも胎土に砂粒を多く含むため、別窯であろう。浜

坂焼か。並釉に140は浅黄橙、141は浅黄の釉を流しがけする。140の注口は三つ孔。

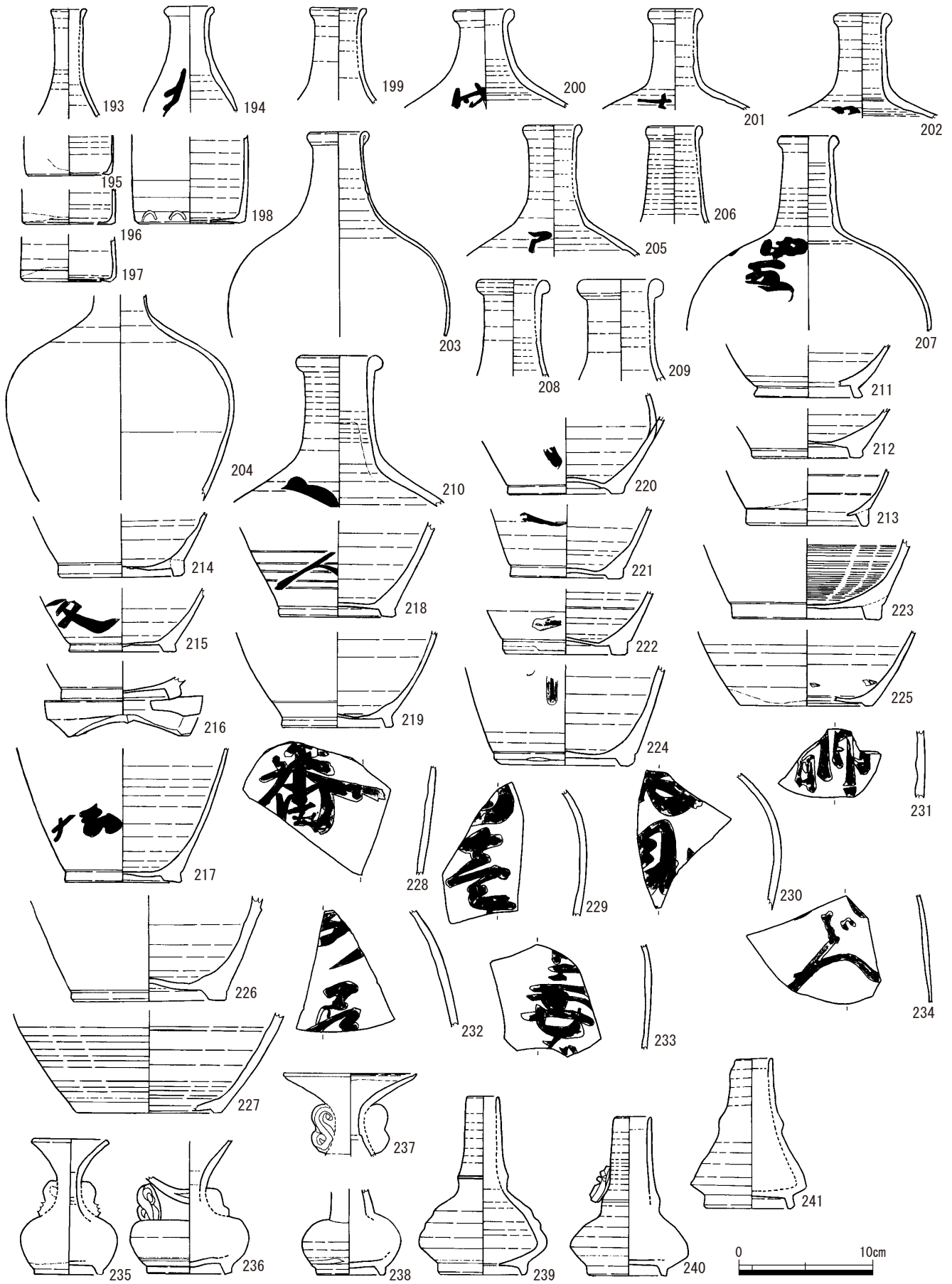
142～148は土瓶の身。体部は算盤玉状で142～144・146・147は山形状、145は紐状の釣り手が付く。注口と体部の接合部には3～5つの注ぎ孔をもつ。内面は並釉。外面は、142が黒褐の釉、143が黒の飴釉、



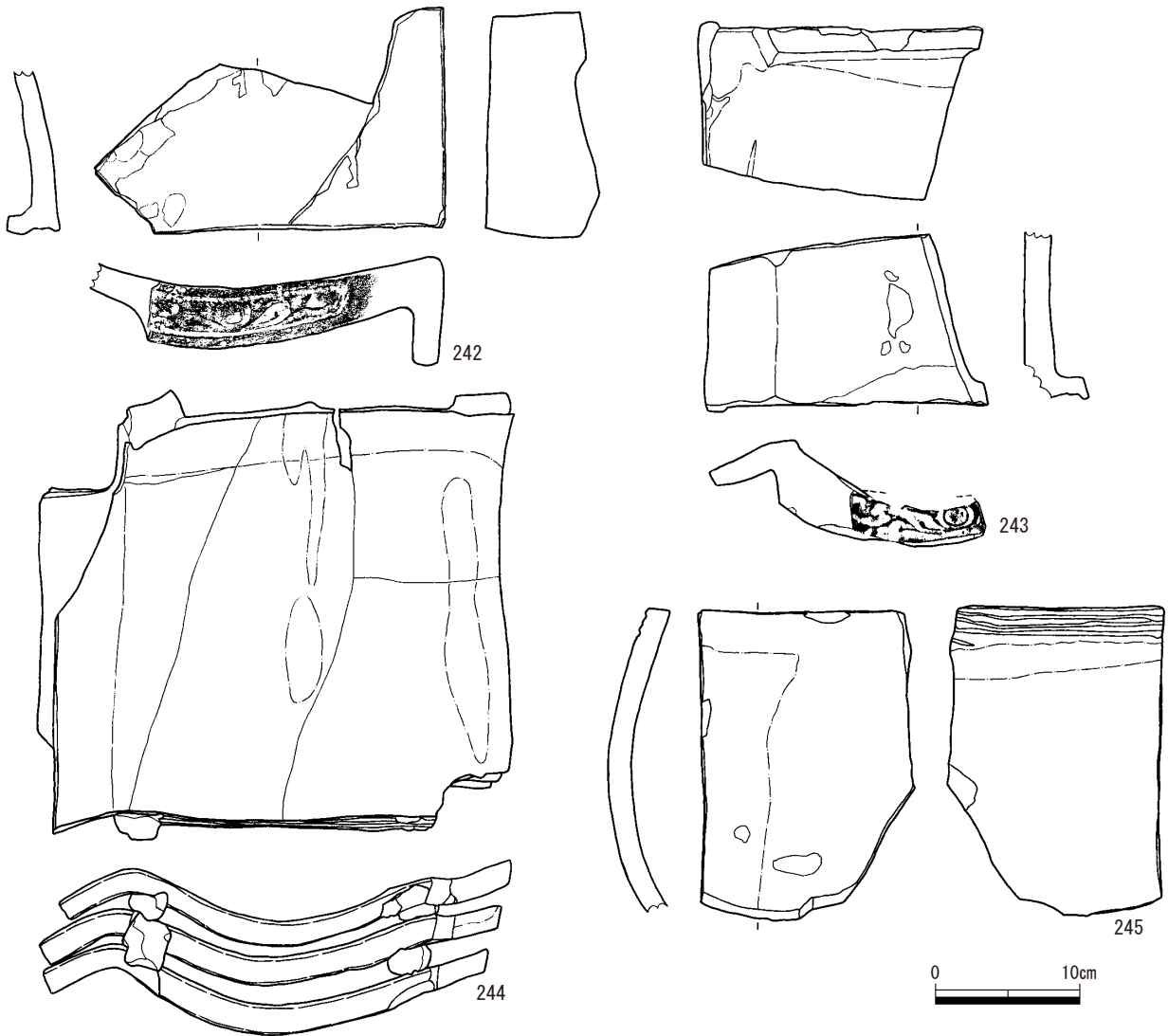
第8図 陶器 (4)



第9図 陶器 (5)



第10図 陶器 (6)



第11図 瓦

144 が黒褐に灰白の海鼠釉、145・146 がにぶい黄橙、147 が灰黄の釉、148 は連続する凹線に並釉に白色・黒色の護摩状の釉。注口部は体部に斜めに付き、陶土は粗く、砂粒の混入が多い。別窯の製品と考える。

m 甕 (149～178)

石見焼では「はんど」と呼称される（江津市文化財研究会 1988）。当窯では個体数が多く、主要な生産品の一つとみられる。149～165 は口径が 30 センチ未満の小型品、166～176 は口径が 30～40cm の中型品、177 はそれ以上の大型品がある。

149・154・156・157・159・160・163～168・171～174・177 の口縁部は、内外面ともに拡張する、いわゆるハンマー状の口縁部のほか、150～153、161・162 の内面は平坦で外面のみ張り出す。155・158・175・176 は内面口縁端部下を強くナデることにより、結果的に内面に張り出す。149・161 は黒褐、150 は暗褐、151・152～154・160・162・163・165 は褐色、

155 は灰褐、156・159・164 はにぶい赤褐、157 はにぶい黄褐、158・161 はにぶい黒褐の釉。163 は体部に黒色の「流し」釉をかける。151 の口縁端平坦面の釉がカキ取られ、匣鉢を兼ねた伏せ焼きか。

166・174・175 は体部外面に波状文をもつ。166 は暗赤灰にオリーブ黄の「流し」釉、167 はにぶい赤褐で、口縁端平坦面は露胎。やはり伏せ焼きか。

168・169 は別個体。168 はにぶい赤褐に黒色の「流し」釉、169・170 は暗赤褐、171 は褐色、172・175 は黒色、176 は灰黄褐の釉。173 は赤褐、177 は大型の甕で黒褐の釉を横方向のハケ塗り。陶土も砂礫を多量に含む。174 は黒褐の釉。内面口縁部付近に連続する斜め方向の成形痕。173・174・177 は別窯の製品。なお、178 は甕の体部に取付く浮き出し文。暗褐に黒色の「流し」釉、179 は袋物に取付く把手で、暗褐の釉。

n 把手 (179)

179 は水注もしくは油注の把手。暗褐の釉。